

『身体としての書物』

今福龍太著

東京外国語大学出版社 二〇〇九年三月

『書物にならんとする世界』ではなく、これらの『世界にならんとする書物』たちのさまさまに異なつた野心を受け継いだまま、わたしたちは二一世紀への敷居をまたいだ。この新たな世紀は、数千年におよぶ人類の知性史において書物に託されてきたアイデアが、本という外形のなかで成就されてゆくかどうか、が自明ではなくなつた、はじめての時代である」(七頁)。世界が書物にならんとするというイメージを抱いた一九世紀後半のステファヌ・マラルメから、逆に書物が世界にならんとするというふうな発想の転換を図つた二〇世紀前半のジェイムズ・ジョイスを経たという認識のもと、著者である今福氏がこのように診断するいま、まさに立ち上げられた東京外国語大学出版社の嚆矢を切つて昨年三月に公刊された本書は、書物という概念において「旧来の本というメディア」(八頁)と「電子テクノロジーが開いた新しいテクスト空間」(同)とがせめぎあう現在の状況のなかで、それでもなお書物をもつ物質性の意味を問いつつ、この問題を自覚的に俎上に載せたいくつかの具体的な文学作品をよりどころに著者が思考を繰りひろげた仕事で

ある。著者は、「書物としてのアイデア」(二〇頁)に「事物と精神性の統合体としての本」(同)という定義を与える。「身体としての書物」とは、このように本として表現されるある不変の物質性の謂いなのである。

何よりも本書が物質性に定位するものであると言えるのは、本書のなかの引用が括弧ではなくゴシック体でなされているということである。「小型本の一行のスペースにできるだけの小さな活字を凝縮して収めるといふ実践的・経済的な理由から」(二八頁)生まれたというイタリック体の成り立ちを喚起するのをはじめ、著者が受けもつた学部のゼミナール(このゼミナールは本書が生まれるもととなつた)で実際に学生に本を制作させたり、さらには活版印刷術の歴史に言及しつつ造本のプロセスを表わす「ページネーション」の詳細について論じたりするなど、書物の物質性に著者がきわめて自覚的であるのはまちがいない。だから、引用箇所をゴシック体で表示するという試みは、字体をあえて変え、浮き立たせることによつて書物の物質性をいやがおうにも読者に意識させる効果をもつている。まるでそこから、個々の形態をとつた具体的な本がつぎつぎと立ちあがってくるとでもいうかのように。

ところで評者は、右のことに関連して、インターネット検索エンジンで「ゴシック体 引用」を検索し、それからさらに英語の「sans-serif citation」、ドイツ語の「Grotesk Zitat」を検索してみた。すると、上位の検索結果では少なくとも、引用をゴシック体でおこなうという例は見つからなかった。評者がこゝういった検索をおこなつたのは、引用をゴシック体で表示するという著者の試みが独自のものであるのかどうかについて

